

第4問

標準

《出典》

陳寿『三国志』

陳寿（二三三～二九七年）は中国晋の歴史家。蜀の官吏として才名高く、『古国志』『益都耆旧伝』『三国志』などの著作がある。『三国志』は中国二十四史の一つで、魏・呉・蜀の三国の歴史を記している。魏志三十巻、呉志二十巻、蜀志十五巻の全六十五巻から成っている。

要旨

本文は三段落から成る。各段落の内容は以下の通り。

1

神童・沖（哀王沖…）

太祖の子、沖（哀王）は幼少の頃から賢くて才知に秀でていた。



2

太祖の鞍が鼠にかじられる

（時軍国多事…） ※問2・問3・問4・問5

倉庫の中にあつた太祖の馬の鞍が鼠にかじられ、倉庫番の役人は大いに恐れた。そこで沖は一計を案じた。自分の衣服に穴をあけて鼠にかじられたようにみせかけ、鼠に衣服をかじられた者には災いが起こると言つて嘆いた。すると太祖はたんなる迷信だと言つてなぐさめた。すかさず、役人も馬の鞍の件を報告したが、太祖は「そばにある子供の衣服さえかじられるのだから、ましてや倉庫の柱に懸けてある鞍がかじられるのは当然だ」と笑い、何のおとがめもなかった。

沖のはからいによつて死罪を免れた者は多い。太祖も沖をほめ、自分の後継者と考えていた。しかし沖は十三歳で重病にかかり、死去した。嫡男の曹丕が悲嘆にくれる太祖をなぐさめると、太祖は「沖の死は自分には大きな不幸だが、お前たちには最大の競争相手が消えて幸運だろう」と言った。

よみ

哀王沖、字は倉舒、少くして聡察岐嶷たり。

時に軍国多事にして、刑を用ふること嚴重なり。太祖の馬鞍庫に在りて、鼠の齧る所と為る。庫吏必ず死せんことを懼れ、議して面縛し罪を首さんと欲するも、猶ほ免れざるを懼る。沖謂ひて曰はく、「三日の中を待ち、然る後白ら帰せよ」と。沖是に於いて刀を以て単衣を穿ち、鼠の齧る者のごとくし、謬りて失意を為し、貌に愁色有り。太祖之れを問ふに、沖対へて曰はく、「世俗以て鼠の衣を齧る者は、其の主不吉なりと為す。今単衣齧らる、是を以て憂戚す」と。太祖対へて曰はく、「此れ妄言なるのみ。苦しむ所無きなり」と。俄にして庫吏鞍を齧らるるを以て聞す。太祖笑ひて曰はく、「兎衣の側に在りてすら、尚ほ齧らる、況んや鞍の柱に懸けたるをや」と。一も問ふ所無し。沖の仁愛識達、皆此の類なり。

凡そ応に罪戮すべくして、沖の微かに弁理する所と為り、頼りて以て済宥せられし者、前後数十なり。太祖数群臣に對して称述し、後を伝へんと欲するの意有り。年十三にして疾病なり、太祖親ら為に命を請ふ。亡ずるに及びて、哀しむこと甚し。文帝太祖を寬諭するに、太祖曰はく、「此れ我の不幸なるも、汝曹の幸なり」と。

哀王の曹沖は字を倉舒といい、幼少の頃から賢くて洞察力が深く、才知に秀でていた。

当時、軍事にも国政にも難事が山積して、刑罰を適用するのに嚴重であった。太祖の馬の鞍が倉庫の中で鼠にかじられてしまった。倉庫番の役人はきつと死罪になるに違いないことに恐れおののき、考えをめぐらして自ら両手を後ろ手に縛って罪を申し出ようと思ったが、それでもやはり極刑は免れないのではないかと、大いに恐れていた。沖はこの倉庫番に「三日の間待って、それから自首して罪に服せ」と言った。そして沖は刀でひとえ物の衣服に穴をあけ、鼠がかじったもののようにし、力を落とした様子に見せかけて、さも心配事のあるような顔つきをした。太祖がそのわけを尋ねると、沖は「世間では、鼠が衣服をかじると、その持ち主にはよくないことが起こるとしています。今私の一ひとえ物が鼠にかじられました。それで恐れ、心を痛めているのです」と答えた。太祖は「そんなのはただのたからめだ。思い悩むことはない」と答えた。すかさず倉庫番は、鞍が鼠にかじられたことを申し上げた。太祖は笑って「子供の衣服が身近にあつてさえかじられるのだから、ましてや柱に懸けてある鞍がかじられるのは当然だ」と言い、いつさい倉庫番の責任を追及しなかった。沖の思いやりと見識の深さというのは、すべてこのような性質のものである。

およそ死罪に問われて当然のもので、沖に内々に処理されて、救済され罪を許された者は、数十人にもものぼる。太祖は、並みいる家臣たちに向かつて、しばしば沖をほめて言い、自分の後継者にしたいという意向があつた。しかし沖は、十三歳にして重病にかかり、危篤におちいった。太祖は自ら延命の祈りを行った。が、沖は亡くなり、太祖はひどく悲しんだ。文帝曹丕が太祖をなだめたが、太祖は文帝に対してこう言った。「沖の死は、私にとってはまことに不幸なことだが、お前たちにとっては幸運だな。(最大の競争相手が消えたのだから)」と。

解説

問1 答 (ア)⑤ (イ)②

(ア)「罪を首す」とあるように、この「首」は「罪を申し出る(白状する)」という意味。したがって⑤が正解。

①と②は「かしら、はじめ」の意味。③と④は「くび」の意味(④は、首を振りうなずいて同意を表すこと)。

(イ)「ほめる」という意味で用いられており、正解は②。

他はいずれも「となえる、呼ぶ」という意味。

問2 答⑥

「妄言」は「でたらめな言葉」。文脈的にみても、いかにもでたらめらしい内容という面からみても、正解は⑥しかない。あとはすべて「此」という指示語から、内容的にも位置的にも遠すぎる。「妄」に迷わされて④や⑤を選んではいけない。いずれも「言」ではない。

問3 答⑤

「Aすら尚ほB、況んやCをや」は「AでさえBなのだから、ましてCはなおさらBだ」の意の抑揚形である。「児衣」はすなおに「子供の衣」ととればよく、正解は⑤。

①と③は前半は正しいが、後半の「況」以下の解釈が誤り。

②は前半・後半とも誤り。

④は後半は正しいが、前半「太祖の衣」が誤り。

抑揚形

A^{スラ} A^{スラ} A^{スラ}
尚^ホ 猶^ホ 且^ツ

B B B

而^{ルラ} 況^{ンヤ}
況^{ンヤ} C^ヲ
於^{テラ} 乎
C^ニ
乎

問4 答II①

ここでは、「一」は「ひとつも、全く（…ない）」という意味。また「問」は「問いたです、取り調べる」の意。何を問うのかが問題となるが、ここでは罪を問わなかった、ということ。したがって、正解は①となる。

②では「問」の動作主があいまいだし、③では太祖以外の動作主のように考えられる。

④は「見舞う」、⑤は「怪しむ」がそれぞれ誤り。

問5 答II③

「此」は「以刀穿单衣……是以憂戚」の行動全体を指している。要するに、倉庫番の過失をかばうために沖がわざと自分の衣に穴をあけ、鼠にまつわる迷信を口にして、気にすることは無いという太祖の言質を引き出した、ということである。以上の内容に合致する③が正解。

①は「自分たちの罪を認める」がおかしい。沖が自分の衣に穴をあけたことは「罪」ではない。

②は「太祖の衣にまで穴をあけてしまった」「倉庫番の忠告を素直に聞き入れて謝罪し」が本文の内容と合わない。

④は「倉庫の中の穀物が横領されている事実」はなく、「強欲な倉庫番」というのも当たらない。

⑤では太祖が「俗信にとらわれて失意にあった」が誤りで、太祖はむしろ俗信の否定者というべきである。それは「此妄言耳。無所苦也」「一無所問」から明白である。また、沖が自分の衣に穴をあけて、それを太祖に見せた時点では、まだ太祖は自分の鞍が鼠にかじられたことを知らないはずである。

問6 答Ⅱ①

「不幸」とは、太祖が「有欲伝後意（＝後継者にしたいという意向がある）」だった沖が、わずか十三歳にして早世したことを指す。「幸」の方は本文中には特に述べられていないが、二十五人の息子の中で後継者の本命たる沖が死んだことで、あとの二十四人にも後継者となる望みが出てきたことを言うのだろう、という推測はつく。以上の結果、正解は①とすることができる。

▼他の選択肢を吟味しよう。

② 哀王が死んだことは、太祖にとっては賢明な^x臣下を失ったことを意味し、文帝らにとっては^x平素は近よりがたい父をこの機会を利用してなだめえたことを意味しているから。

③ 哀王が死んだことは、太祖にとっては^x的確な助言をしてくれる人物を失ったことを意味し、^x群臣にとっては後継者が嫡男である文帝に決着し、争いに巻き込まれなくてすむようになったことを意味しているから。

④ 哀王の死に対して太祖がひどく悲しんだことは、太祖にとっては^x愛情に^溺れたさまを群臣の前にさらすことを意味し、文帝らにとっては^xふだんは冷徹な父のみせた情愛にふれることができたことを意味しているから。

⑤ 哀王の死に対して太祖がひどく悲しんだことは、太祖にとっては^x一時的に後継者問題を的確に処理する能力を失ったことを意味し、^x群臣らにとっては文帝を後継者に推す絶好の機会が到来したことを意味しているから。

②は「臣下」が不適切な表現。太祖は息子の沖を、臣下としてより後継者としてみていた。また、文帝が父を「この機会を利用してなだめえた」というのも誤り。太祖の言葉は、なだめた文帝への皮肉である。

③の、群臣が「争いに巻き込まれなくてすむようになった」も本文に該当箇所がない。「的確な助言」も誤り。

④は「愛情に溺れたさまを群臣の前にさらす」が誤り。本文の内容からずれている。「冷徹な父のみせた情愛に（文帝が）ふれることができた」というのも、②の後半で述べた理由から、採用できない。

⑤では、太祖が「後継者問題を的確に処理する能力を失った」とか、群臣が「文帝を後継者に推す」といった内容を本文からは読み取れない。